

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13487

研究課題名(和文)地域の母語支援者の教科学習支援への支援参加過程に関する研究

研究課題名(英文) Research on the process of support participation of mother tongue supporters in subject learning support

研究代表者

高梨 宏子 (TAKANASHI, KOUKO)

東海大学・スチューデントアチーブメントセンター・講師

研究者番号：90748542

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：近年増加する外国人児童生徒の教育の中でも教科学習の遅れ、母語保持育成といった課題に着目した。外国人児童生徒に対して学習支援を行う地域の母語支援者が、公立中学校国際教室の支援活動に参加していく過程をインタビュー調査およびフィールドワークによって明らかにした。明らかになったこととして、母語支援者は母語に対する認識を変容させ、支援参加は「母語で学ぶこと」の意義を理解する過程でもあったと言える。また、日本語力の問題等の理由で支援参加ができない時期を乗り越え、支援ができる自己への認識や教育観の変容が起きていた。母語支援者として成長していく過程であることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果の意義は、まず、地域の母語支援者の支援参加の過程を明らかにすることで、何が支援参加を促進・障壁となるのかを見いだせる。また、かれらにとって支援参加はどのような経験となるのかを明示するといふことが挙げられる。さらに、学校での支援を展開していく上で、教員の意識も重要になる。教員が地域の母語支援者をどのように受け入れているのかを分析することで、学校での母語を活用した支援の展望を見出せる。これらの結果から、地域の母語支援者が活躍できる学習支援の場のあり方を検討することができる。

研究成果の概要(英文)：In recent years, we have been focusing on issues such as delay in subject learning and promotion of native language retention among the increasing number of foreign students. We have clarified the process by which local native-language supporters can provide learning support to foreign students through interviews and fieldwork and participate in support activities in international classrooms at public junior high schools. It became clear that participation in support provides a growth opportunity for native language supporters. Additionally, by participating in support activities, native language supporters have transformed the foreign students' perception of the native language. Furthermore, native language supporters' perception of their role and their views on education improved. Participation in support activities was also considered a process of understanding the significance of 'learning in one's native language.'

研究分野：年少者日本語教育

キーワード：地域の母語支援者 外国人児童生徒 教科学習支援

1. 研究開始当初の背景

日本語を母語としない子ども達(以下、子どもとする。)は、日本語ができるようになってからも教科学習に取り組むのは難しいと言われている。学習言語習得には長く時間を要することが背景にある。また、接触機会の減少から母語の喪失も課題となっている。これらの課題は、子どもの認知発達、アイデンティティの確立という人間的成長において重要なことであるこうした課題にこたえる学習方法に、母語と日本語の両言語を使いながら教科学習に取り組む「教科・母語・日本語相互育成学習モデル(岡崎 1997)」がある。このモデルは、教科内容を母語で学習する場面と日本語で学習する場面で構成され、子どもは理解可能な母語で教科内容を理解し、その理解を土台に日本語での学習に取り組む。

「教科・母語・日本語相互育成学習モデル」におけるこれまでの研究では、このモデルによる学習によって子どもの母語や母文化の活用による母語能力の保持育成、日本語能力の向上、教科学習の理解促進という機能を持っていることが明らかにされてきた(朱 2007、清田 2007 など)。また、こうした学習支援の担い手である留学生が担ってきたが、留学生は帰国や就職などにより支援を継続的に参加できないという課題がある。この課題に対し、地域の母語支援者の参加が期待される。地域の母語支援者とは、学校の近隣に定住する外国人であり、国際結婚などで来日した主婦など子どもの支援に関わる意思を持った地域の支援者のことを指す。地域の母語支援者が支援に参加した事例を対象とした研究に、宇津木(2010)や清田(2014)があり、かれらが探索的な支援を展開していることから、地域の母語支援者が支援に参加することは、子どもたちの学習を広げていく可能性が指摘されている。支援が安定して継続的に行われる必要を鑑みれば、継続性に焦点を当て、支援参加に対する意識がどのように形成されるのかまたは変容し、参加がなされていくのかを明らかにする必要がある。子どもが抱える課題は多岐にわたる。特に教科学習の支援は重要であり、子どもの言語の発達・習得過程への配慮が必要になる。こうした配慮を含んだ教育実践を展開させていくには、子ども達の学びを支える教育関係者が必要不可欠である。中でも、子ども達の母語ができる教育関係者の存在は重要である。母語は子どもにとってアイデンティティであり、学習を支えるものとなる。しかし、日本の公教育において、子どもの母語を保持育成する機会は多くはなく、それを支える支援者も少ないことが指摘される。

かれらの参加過程には、地域の母語支援者を受け入れ、支援実施を支える学校教員の存在も影響していると考えられる。日本語支援者や教員と地域の母語支援者との関係が支援者の参加をどう支えているのかについても調査・分析する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、子どもの母語ができる母語支援者に注目をする。かれらがどのように支援に参加していくのか、また学校教員はどのようにかれらを受け入れていくのかを明らかにすることを目的とする。これらの分析を通して、母語支援者を含めた教育体制の充実に向けた考察をしていく。

具体的には以下の3点の研究課題に関する調査・分析を

- (1) 地域の母語支援者は、支援に対してどのような意識を持っているのか。
- (2) 地域の母語支援者は、どのように支援に参加していくのか。
- (3) 支援を実施する公立中学校国際教室担当教員は、地域の母語支援者をどのように受け入れているのか。

3. 研究の方法

公立中学校国際教室の放課後支援教室にて、母語支援者として複数年度にわたって教科学習支援を行っていた地域の母語支援者(4名)および国際教室担当教員を対象に半構造化インタビューを実施した。インタビューの分析では、M-GTA(木下 2003)を援用して、質的に分析した。また、分析の過程において、支援記録(支援者同士が支援内容や子どもの反応等を記録し、共有するために作成した書類)を参考資料として使用した。

4. 研究成果

(1)「地域の母語支援者は、支援に対してどのような意識を持っているのか。」を研究課題として研究では、複数年度にわたって支援に参加し続けてきた、2名の地域の母語支援者に半構造化インタビューを実施した。多くの子どもの学びを支えてきたことから、母語に対する認識が変化していった様子が見受けられた。母語保持育成への期待が共通して挙げられ、母語を使って学ぶことが抽象的な概念ではなく、母語支援者にとって具体的な現象として捉えられるようになったという特徴も見られた。実践をしていくことで、「母語で学ぶこと」を理解するようになっていったと考えられる。

(2)「地域の母語支援者は、どのように支援に参加していくのか。」を課題とした研究では、4

名の母語支援者に対して行った半構造化インタビューデータを質的に分析した。分析の結果、日本語力の問題などから支援に参加できない時期もあったが、少しずつ通訳などの支援活動に参加していった。教科学習を母語で支援する「日本語相互育成学習モデル」の支援に参加するようになり、その過程では、自己への気づきや教育観の変容が生じ、自己の可能性を認識し、成長していくプロセスがあることがわかった。また、子どもやその親を含めた支援の捉え方が多様化していることも示唆された。支援を支えていたものは、日本語支援者と国際教室担当教員との協働的支援体制であり、母語支援者が支援に参加していくためには支援体制の充実が必要であることが指摘された。

(3)「支援を実施する公立中学校国際教室担当教員は、地域の母語支援者をどのように受け入れているのか。」では、国際教室担当教員に注目した。今回対象となった教員は、母語支援者の支援に対して肯定的な意識を持ち、かれらの熱意と人柄に信頼を寄せており、高く評価していた。それは、子どもが母語を使うことによって学習意欲が促進され、ハードルが高い学習に挑戦することができるという結果が裏付けとしてあった。ただし、異なる文化的背景を持つ母語支援者には、学校文化やルールの共有をするなど配慮をしていたようである。こうした支えが受け入れ・支援サポートを促していったのではないかと考えられる。

以上の結果から、母語支援者の支援参加において重要なことは以下の2点あると考える。

個々の背景を活かした支援参加

支援に参加しようとした動機として「日本語で困っている子どもの役に立つことがしたい」という思いがあった。参加していた母語支援者たちは、来日時期や個々の環境は異なる。ただ、共通していたものとして、子育て経験であったり、過去の通訳支援などの背景を活かした活動をしたりしていた。自身がもつ母語・母文化という貴重な資源を活かせる場があることは、外国人住民のアイデンティティを支えていくことでもあると考えられる。

協働的支援体制

定住する外国人として、子どもたちの役に立ちたいという思いは、母語支援者の支援参加を促していくものになるだろう。ただ母語が話せれば母語支援者となるかというところではない。例えば、本研究で対象としてきた母語支援者らは、母語を使うこと、教科学習を支援することを理解しながら、活動していた。子どもの反応やかれらとのやりとりから学びながら、支援活動を充実させていた。こうした展開は、日本語支援者や教員との協働での支援が生み出したものだと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高梨宏子	4. 巻 7
2. 論文標題 母語支援者の学習支援活動への参加過程に関する研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東海大学スチューデントアチーブメントセンター紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宇津木奈美子・高梨宏子
2. 発表標題 母語を活用した中学国語の学習支援における支援者支援－学習支援記録の分析から－
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高梨宏子
2. 発表標題 「外国につながる子どもの支援における外国人支援者参加の可能性」
3. 学会等名 日本社会教育学会第65回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高梨宏子
2. 発表標題 継続的に支援に参加した地域の母語支援者の学び ライフストーリーによる事例研究
3. 学会等名 2017年度日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田中雅文監修	4. 発行年 2023年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 12
3. 書名 生涯学習と地域づくりのハーモニー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------